

經濟論叢

第七十五卷 第三號

カウツキー帝國主義論の原型…………… 靜 田 均 (1)

反トラスト政策と「條理の原則」…………… 越 後 和 典 (19)

選擇と不確實性…………… 西 川 徹 (40)

労働黨の政策體系について…………… 寺 尾 晃 洋 (50)

[昭和三十年三月]

京都大學經濟學會

カウツキー帝國主義論の原型

— 最初の論文について —

靜 田 均

帝國主義に關するカウツキーの見解は、一九一四年から一九一七年にかけてつぎつぎに發表された數篇の論文と一冊のパンフレットによつて、その概貌を窺うことができる。

すでに第一次世界大戰の勃發にさきだつて、マルクス主義は二つのすぐれた理論的業績を生み落していた。ヒルファードイングの『金融資本論』（一九一〇年）とローザ・ルクセンブルグの『資本蓄積論』（一九一三年）がそれである。この二つの著作は學說史的に見てすこぶる水準の高いものであつて、その後のあらゆる批判にも拘らず、今日なお依然として古典的名著たる誇りを擔つてゐる。いづれも著者そのひとの生涯を踏した代表作といふことができよう。これらの勞作にくらべると、カウツキーのそれは、量においても質においても、かなり見劣りのすることゝ否むわけにはいかない。前者が多年にわたり思索と推敲を重ねた頭腦的勞働の結晶だと評しうるとしたら、後者はむしろ當面の必要に迫られ、そのつど書きおろされた短篇の堆積にすぎず、いかなる意味においてもカウツキー

の長い文筆活動の代表作とは見做しがたい。が、それにも拘らず、われわれが彼の帝國主義論について考察を拂うことは、けつして無意義ではないであらう。けだしカウツキーといえば、修正主義の擡頭よりこのかた、久しくドイツ社會民主黨の内部における正統派の理論的スポークスマンとして鳴らした大立物であり、また第二インターナショナルの全史を通じ、つねに輝ける鬪將としてその名聲をうたわれていたからである。とりわけ戦時中のただならぬ緊迫した情勢下にあつて、彼の發言が大きな國際的反響をまきおこしたという歴史的事實に想到するとき、われわれはひとしお大きな感興をいだかざるをえない。

二

第二インターナショナルは、すでに一九〇〇年ごろから戦争問題について討論を重ねたが、その結果、戦争の原因は民族的な紛争や氣紛れな専制政治にあるのではなく、むしろ帝國主義者や植民地獲得熱にあるという見解に傾くようになった。とりわけ一九〇四年から一九一四年までの期間は、第二インターナショナルの歴史の上で第三期を劃するといわれているが、それはなかならず帝國主義的戦争の危険の切迫に對し、各國民の覺醒を促すとともに、そうした破局的な事件に對するインターナショナルの態度を決定しようとする努力した時期として、特徴づけることができる。かくて劃期的な決議は、まず一九〇七年のストットガルト大會において行われた。ついで一九一〇年のコペンハーゲン大會は、同じ反戰闘争の指導原則を再確認し、さらに一九一二年のバーゼル大會は三たびこれを確認し、あわせて長文の宣言を公表した。それはあまねく全世界の勞働者階級に懇えて、戦争の防止に協力することを要請すると同時に、各國の資本家政府に對して、戦争の勃發が不測の變革をもたらすであらう危険を警告し、強く

その注意を喚起しようとするものであつた。

こうした華々しい宣言にも拘らず、歴史の皮肉は世界大戦の回避を許さなかつた。來たるべきものは、ついに來たのである。不幸は單にそれだけに止まらない。第二インターナシヨナルは戦争の勃發を契機として、決定的に三つの分野にわかれ、兄弟壻にせめぐの悲劇を敢えてするに至つた。いわゆる右派、中道派、左派の相剋がそれである。右派の立場は侵略戦争に反對を表明し、祖國防衛に名をかりて、自國政府の戦争政策を支持し、かつそれに協力しようとするものであるから、排外主義的であり、民族主義的であり、かつまた帝國主義的であることは、いふまでもない。代表的な人物をあげると、ドイツではパウエル・レーンシユ、エドアルト・ダビット、ジュデクーム、ヒリップ・シャイデマン、グスターフ・ノスケ、フリードリッヒ・エーベルト、ウォルフガング・ハイネ等々である。彼等はドイツの勞働者の利益はドイツ國民の利益と合致し、またドイツ文化の利益と合致する、ドイツの勝利は國際プロレタリア全體を利益するだらう、と説いた。これに對してフランスやベルギーの右派の人たちは、ドイツの態度を口をきわめて論難した。代表的人物としては、ピエール・ルノーデル、アルベール・トーマ、ウァンデルベルデ等がある。イギリスで同様の役割を演じたものはH・Gウエルス、ロバート・ブラッチフォード、H・Mハインドマン等である。

左派の立場はあくまで戦争反對を堅持し、より激烈な反戦活動を要求しただけでなく、内亂を通して社會革命を實現しようとはかつた。ドイツではカール・リーブクネヒト、フランス・メーリング、クララ・ツェトキン、ローザ・ルクセンブルグ、オーストリアではフリードリッヒ・アドラー、フランスではピエール・モナッテ、ア・メルヘーム、イギリスでは獨立勞働黨の面々、ロシアではレーニン、トロツキーなどがこれに屬する。

これら左右兩派のいわば眞中どころに立つのが中道派である。彼等は戰時豫算に無條件で賛成することには反對だが、各國の社會主義者がとつた參戰の態度はいちおう不可避的なものとして容認する。ただし社會主義者であるかぎり、社會主義者の國際的提携の原則を放棄しようとはせず、速かに事態の收拾につとめ、各國の政府に平和條件の表明を迫つた。ドイツではK・カウツキー、E・ペルンシュタイン、フリーゴ・ハーゼ、アルツール・クリスピン、ゲオルグ・レーデブル、フランスではジャン・ロンゲ、イギリスではラムゼイ・マクドナルドなどが主な顔ぶれである (L. L. Lorwin, *Labor and Internationalism*, 1929 p. 15-158)。

いづれにせよ、數においては右派が斷然多く主流を形づくり、これに反して、左派や中間派は少數にすぎなかつた。カウツキーは前述のごとく中道派に屬するが、一九一六年三月國會において政府の戰時豫算に反對投票を行つたかどで、ドイツ社會民主黨を除名された。そこで同志十七名と語らつて、院内活動を繼續すべく『社會民主協働團』を結成したが、一九一七年四月に至つて左派の『スバルタクス團』と合同し、新たに『ドイツ獨立社會民主黨』を創立した。その後一九一八年十一月のドイツ革命を契機として、『スバルタクス團』の面々は脱黨し、『ドイツ共產黨』を結成した。一九二〇年十月ドイツ獨立社會民主黨は、ハレ大會で第二インターナシヨナルの承認問題をめぐつて黨内が左右に分裂し、左派の人々はドイツ共產黨にはしつた。一九二二年九月、ドイツ獨立社會民主黨はドイツ社會民主黨に合流した。かくしてカウツキーは戰後ふたたびもとの古巢に戻つたわけである。われわれは彼の帝國主義論を顧みるとき、その背後にこうした彼の波瀾に富んだ經歷を想い浮べないわけにはいかない。

冒頭において指摘したように、帝國主義に關するカウツキーの勞作は、一つの系統だつた著書の形にまで纏められてはおらず、論文やパンフレットの形をとつて發表されている。それらはもちろん相互の間に密接な關連を有するのであるが、時には重複して論じられている箇所もあり、また論争の過程において當初の不備が補足され、明確化した節があるばかりでなく、時には論旨にいささか一貫性をかき、焦點のズレを生じたかと疑われるところもなideではない。自然われわれの考察は、なるべく發表の順序にしたがつて慎重に展開されなければならないであろう。それゆゑ、本稿ではさしあたりまず彼の最初の論文をとりあげ、いちおう原型を措定しておこうとおもう。

帝國主義に關するカウツキーの最初の勞作は、一九一四年九月十一日號の『ノイエ・ツァイト』誌上に掲げられた『帝國主義』と題する論文である。この論文はわずか一四頁の小篇ではあるけれども、彼の思想の骨子はひととおり語られている、といつてよい。この論文の中でまず第一にわれわれの注意をひくのは、欄外に編集者の斷り書が附いているという點である。周知のごとくカウツキーは、一八八四年『ノイエ・ツァイト』の創刊當時から、一九一六年クーノーにその席をゆざるまで、三〇年の久しきにわたり、同誌の責任編集者の地位にあつた。だから右の斷り書は、實のところ論文の執筆者である當のカウツキー自身によつて加えられた註釋であると解しても、おそらく不都合はないであらう。

一九一四年、第二インターナショナルは八月下旬を期し、ウイーンで大會を開く豫定になつてゐた。主要の議題は帝國主義であり、決議文の起草にはオットー・パウアーがあたることにきまつてゐたのだが、はからずも世界大戦の勃發によつて、大會は取止めとなつた。同時に大會を記念して特集號を出すという『ノイエ・ツァイト』の計畫も、變更のやむなきに立ち至つた。

さて前述の編集者の附記の語るところによると、カウツキーの論文はもと大戦勃發の數週間以前に纏めあげられたものであり、大會特集號に掲載するはずであつたのだが、特集號の計畫が御破算となつたので、發表に際して書き改められたものである、という。すなわち原稿の一部を削除するとともに、新しい補筆を加えて書きあがつたのがこの論文である。そして削除された箇所はインターナショナルの大會に關する部分であり、また加筆された部分は戦争に關する箇所だということであるから、後に述べる超帝國主義に關する部分こそ新たに書き添えられたものと推定してよいであらう。

論文の成立事情は以上のごとくであるが、編集者はなお論文の意義についても觸れている。いわく、『この論文は純理論的性質のものであるとはいへ、實踐との關連を失つたわけではなく、その解明に寄與せんとするものである』と。果してそうだとすると、この論文は帝國主義の單なる理論的究明たるに止まらず、プロレタリア階級の實踐やマルクス主義としての戰術とも交渉をもつことは、おのずから明かである。

さてカウツキーの論文『帝國主義』の内容はおよそ三つの構成部分よりなりたつ。あるいは同じことだが、三つの論點に要約しえられる、といつてよい。第一は帝國主義の概念規定の問題。それは當然に帝國主義の本質と關連する。換言すれば、帝國主義とは何か、という問題にはかならぬ。第二は帝國主義の原因、その推進力は何かという問題。これは帝國主義の歴史性とも關連せざるをえない。第三は帝國主義の將來性の問題。詳言すれば、帝國主義は何處へ行くという問題であり、一種の見透し論であるが、實踐と最も密接に結びつく部分である。

以下、順をおうて考察を進めよう。

四

カウツキーの帝國主義論は、まず帝國主義という概念の不明確に對する批判から出發する。けだし、概念の不明確は問題の所在を曖昧にし、無用の混亂をひきおこす根源だからである。カウツキーによると、今日の用語例ではカルテル・保護關稅・金融的支配・植民政策のごとき、およそ近代資本主義のありとあらゆる現象が帝國主義という言葉のなかに包括されているかのように見える。だが、このように理解するとすれば、帝國主義は資本主義が生存するための必要物である、という歸結を生むばかりでなく、資本主義は資本主義なしには成立しえないというに等しく、内容の空虚な同義語反復に終つてしまふであらう。そこでカウツキーは、このような一般に見られる用語例をば言葉の濫用にすぎないとして、斷乎これを斥けようとするのである。そして彼は、イギリスではじめて行われた古典的な用法にしたがうべきことを提言し、帝國主義は『一種獨得の政治的活動』にすぎない、と喝破する。

カウツキーによると、イギリス人はかれこれ三〇年このかた帝國主義をば、一方においては尨大な植民帝國のあらゆる部分を母國に結合して一つの統一的な帝國を構成せんとする努力と解し、他方においては、この帝國をますます擴大せんとする努力と解してきたが、いわゆるイギリス大帝國以外の國々においては、實踐的には、後者のみが帝國主義と考えられている。というのは、他の國々はイギリスのように獨立の植民地をもつていないからである。ところで『一種獨得の政治活動』とは、何を指すのであるか。およそ本來の國家が領土を擴大しようとする努力は、帝國主義といえるであらうか。カウツキーは、否と答える。もし一切の版圖の擴張をば帝國主義と名づけるとしたら、帝國主義は書かれた歴史と同じように古いものだ、といわざるをえなくなるであらう。十九世紀の大半を

特徴づけるところの、同じ民族の仕んでいる隣接地域を併合し、國家を擴大しようとする努力のごときも、帝國主義ではない。それはむしろ民族主義の發露である。

このようにしてカウツキーは帝國主義をば、十九世紀の末葉以降を特徴づける新しい政治現象と見做し、いわば歴史的限定性においてその本質を捉えようとする。彼はみづから定義づけを試みていう、『帝國主義とは高度の發展をとげた工業資本主義の産物である。それは、いかなる民族がそこに仕んでいるかを顧慮するところなく、ますます大きな農業地域を征服し、併合しようとするあらゆる工業資本主義的國民の烈しい欲情の中に存する。』“Der Imperialismus ist ein Produkt des hochentwickelten industriellen Kapitalismus. Er besteht in dem Drange jeder industriellen kapitalistischen Nation, sich ein immer grösseres agrarisches Gebiet zu unterwerfen und anzugliedern, ohne Rücksicht darauf, von welchen Nationen es bewohnt wird.” (S. 909).

さて右の定義の翻譯については、若干の釋明が必要であろう。industrieller Kapitalismus という言葉は、普通に産業資本主義と譯されている。それをわざわざ工業資本主義と譯出するのは、いさゝか奇を好むようにとられるかもしれない。しかしカウツキーの帝國主義論では、工業と農業の相互關係、兩者の發展傾向の差異、そこから醸し出される矛盾と相剋が理論構成の樞軸となつてゐる。このことを明確にする意味で工業資本主義と譯した方が、カウツキーの眞意により近いと思われるし、また矢内原博士の先例もあることだから（矢内原忠雄「超帝國主義について」『帝國主義研究』、昭和二三年六九頁、必ずしも一般の慣行に拘泥しなかつた。もう一つことわつておきたいのは、industrielle kapitalistische Nation を工業資本主義的國民と譯出した點である。波多野氏の邦譯では『産業資本主義國家』となつてゐるが（波多野眞譯『帝國主義論』創元文庫版 昭和二十八年 七頁）、原文は Staat ではなく、Nation であるし、

また後にクローノーによつて批判を加えられた箇所でもあるから、わざと文字どおり國民と譯しておこうとおもふ。

さてカウツキーの定義によると、帝國主義の母體であり、また主體でもあるのは、高度工業資本主義にはかならないが、それは資本主義のいかなる發展段階をさすのであろうか。彼が高度工業資本主義を云々するとき、一方で、暗黙のうち低度工業資本主義なるものを念頭においているかに察せられもするのだが、兩者を分つ標識は何なのか、それぞれの特徴はどこにあるのであるか、少しも明かでない。この點、いささか説明不足の譏りを免れぬであらう。後にいたつてクローノーやレーニンから批判の集中砲火をあびたのは、決して偶然ではない。たとえそれらの批判が、カウツキーの眞意に添わぬ的はずれのものであつたにせよ、責任の半ばはカウツキー自身の側にある、といわざるをえない。カウツキーの眞意は、獨占資本主義や金融資本主義のシノニムとして用いたかのように、最初の論文だけからそうした理解をもつことは、至難であるとおもふ。わずかに同じ論文の他の箇所、帝國主義はマンチェスター主義のアンチ・テーゼとして、十九世紀の八〇年以降の現象であると説いているところから推して、それがいわゆる獨占資本主義や金融資本主義と時期を同じうすることを窺知しうるのみ。カウツキーのいう高度工業資本主義が金融資本主義とひつきよう同じであることは、翌一九一五年におけるクローノーとの論争を通じてはじめて明かにされたのであり、また彼が巨大獨占と帝國主義との關連を強調する場面は、一九一七年の論文『帝國主義戰爭』においてようやくわれわれの接するところである。

それはともかくとして、カウツキーの帝國主義の概念において、最も明確に知りうるのは、帝國主義が高度工業資本主義に根ざすとはいへ、それ自體としては政策として、あるいは政治活動として把握さるべきだ、という點であらう。帝國主義はこうした政策ないし政治活動を意味するか、そうでなくてはなくて資本主義の特定の發展段階を意味

するかについては、論者の間に見解の岐れるところであるけれども、この問題に立ちいることは別の機會にゆずり、ここでわたしの指摘しておきたいのは、帝國主義をもつて政策ないし政治活動であるとす見解は、決してカウツキー特有の見解でないということである。むしろ彼にさきだつてすでにヒルファーディングは、帝國主義を『金融資本の經濟政策』であると規定したし、またローザ・ルクセンブルグは、『まだ押收されていない非資本主義的世界環境の殘部をめぐる競争戦における資本蓄積過程の政治的表現である』と道破したことを、われわれは知つてゐる。してみれば、カウツキーは第一次世界大戦の前夜におけるマルクス主義のいわば主流の見解に同調したものと解することができる。それは斬新な見解でもなければ、獨創的な見解でもない。むしろ當時としては、何びとも怪しまぬ平明な所説であつたといえよう。

五

われわれは前節において、カウツキーの抱懐する帝國主義の概念を見た。それは要するに近代資本主義の特定の發展段階に照應するところの政治活動の特殊形態であり、先進工業國の後進農業地域に対する支配と從屬の關係にほかならない。では、そうした意味の帝國主義なるものは、何を根據とし、何を推進力とするのであろうか。カウツキーは帝國主義の最も根本的な原因を、工業と農業との跛行的發展の傾向に見出してゐる。

カウツキーによれば、およそ社會の再生産過程が圓滑に進行するためには、異種の産業部門が互いに均衡をえた關係で發展することが必要である。しかるに資本主義社會においては、工業生産が農業生産より遙かに急激に發展する傾向がある。その結果、工業部門と農業部門の適正な均衡關係が往々にして破られる。こうした矛盾は資本主

義に内在する矛盾であるが、資本主義が發展すればするほど、この矛盾はますます激化する。かくて資本主義的大工業が高度の發展をとげるに至つた先進諸國は、右の矛盾を克服すべく、國外の農業を主とする後進地域を支配しようとする烈しい欲情に驅り立てられる。けだし、後者は前者に對して食糧や原料を供給するだけでなく、工業製品の販賣市場と過剰資本の投下領域を提供するからだ。かくて自己と緊密な經濟的交渉をもつ後進農業地域をますます擴大しようとする先進工業國の絶えざる努力は、いろいろの形態をとつて現われる。そうして帝國主義こそは、まさにその特殊な部類にはかならぬ。

こうした説明に對しては、おそらく一つの疑問が提起されるであらう。なるほどカウツキーの主張するとおり、帝國主義の根源が農業と工業との跛行的發展にあるとしても、そうした傾向が資本主義に固有のものであるかぎり、帝國主義の萌芽はすでに資本主義の出發點に溯る、ということになりはしないか。なぜそれが、資本主義の特定の發展段階においてはじめて帝國主義という露わな姿をとつて現われるのか。ここになお立ち入つた究明を必要とする問題があるようにわれわれには思われる。しかしカウツキーによると、『工業國と交換状態にある農業地域を擴大しようとする資本主義的工業諸國の絶えざる努力は、きわめて多種多様の形態をとりうる』（原本九一七頁、波多野譯本二五頁）のであつて、必ずしもただちに帝國主義の發展を促すわけではない。かつてイギリスの資本主義的工業が世界に雄飛していた十九世紀の七〇年代ごろまでは、自由貿易によつて事は容易に、また圓滿に解決されていた。世界はイギリスの獨り舞台であつて、他の諸國はイギリスの工業製品を購入する代り、イギリスに生活資料と原材料を供給する農業地域たる地位に甘んじていた。イギリスの工業の發展するにつれ、農業地域を絶えず擴大する必要は高まつたけれども、それは自由貿易によつて最もよく果されていたのであり、參加諸國は自由貿易を通してそ

それぞれの利益を収める立場にたつていた。だが、こうした國際的調和という美しい夢も、やがて破られる時期がやつてきた。

すなわち西ヨーロッパ諸國およびアメリカ合衆國は、イギリスより一步おくれて農業國から工業國へ發展した國々である。『これらの國々はイギリスの自由貿易に對し、保護關稅をもつて對抗した。そうしてかつてイギリスによつて行われた國際分業、すなわちイギリスは世界の工場であり、他の地域は農業生産に従事するという區分をする代りに、前記の諸國は……いままお各國に分割されずに残つてゐる工業地域を工業的大國の間に分割してしまつた。イギリスはこれに對抗して行動を起した。かようにして帝國主義が到來した』(原本九一八頁、波多野譯本二七頁)。

ところでカウツキーによると、こうした帝國主義は農業地域に對する資本輸出によつて一層強い拍車をかけられる。『資本輸出は帝國主義と時を同じうして生じたものである』(原本九一八頁、波多野譯本二七頁)。資本輸出を契機として資本輸出國と資本輸入國との關係が、經濟的にも政治的にも緊密の度を加えることは、いうまでもないが、問題はむしろ單なる相互依存、對等互格といういわば同一平面上の關係にすぎないか、それとも支配從屬というような上下の關係であるか、という點にかかつてゐる。カウツキーによると、前者の場合もありうるし、後者の場合もありうる。そのいずれであるかは、資本輸入國の『政治力』につながる問題にほかならぬ。

資本輸出は資本輸入國にまず鐵道の敷設を喚び起す。しかも鐵道の開通によつて商品流通は急速に高まり、人口は増加し、市場は擴大する。それが導火線となつて資本主義的商品がますます輸入されるにつれ、在來の先資本主義的工業は破壊され、プロレタリア化が促進される。プロレタリアの形成は、とりもなおさず近代の大工業の勃

發を可能ならしめる前提條件にはかならない。かくて後進地域の資本主義的生産方法による資源開發の幕が切つて落される。しかしこうした發展が可能であるのは、外國資本の權益を保護するに充分なだけに國家權力が力強いものである場合のことであつて、もし國家が弱體である場合は、そうはいかない。そこに支配從屬の關係を生み出す間隙がある。のみならず、『工業諸國から世界の農業地域に資本輸出を増加しようとする衝動とともに、これらの地域をそれら工業諸國の國家權力のもとにおこうとする努力も大きくなつた』（原本九一九頁、波多野譯本二九頁）。

アメリカ合衆國や舊ロシア帝國のように、先進資本主義國から資本を輸入して、國內に鐵道を開通し、大工業を育成した國々にあつては、それが發展をとげるにしがつて、新しい競争者として世界市場に登場する。ここに資本輸出の惱みがあるのであつて、『これに對抗しようという希望は、資本主義國にとつて農業地域を直接に植民地として、あるいは間接に勢力範圍として自己の支配下におき、それら地域の工業の發展を妨げるようにし、またそれらの地域全體がもつぱら農業生産だけを行うように強制するところの新しい動因となる』（原本九一九頁、波多野譯本二九頁）。そうしてカウツキーによれば、『これこそ、自由貿易を解體させた帝國主義の最も重要な根源なのである』（同上）。

前述のごとく、カウツキーの帝國主義論の根柢には、工業と農業との矛盾という觀點が横たわつてゐる。それは彼の理論の出發點であるといつてよい。ところで工業と農業との相互關連性は、一面において物質代謝の關係である。そしてこの物質代謝の不可缺性こそが、帝國主義の根柢であり、資本輸出はそれに拍車をかける契機にすぎない。カウツキーの理論の骨格がそのようなものであることは、すでにこれを見た。しかるにその後一九一七年に發表された『帝國主義戦争』と題する論文によると、帝國主義の推進力として超過利潤の追求ということが前面にお

しだされ、その背後における獨占資本の役割が強調されている。これは、カウツキーが後にいたつて彼の理論に新たな増築を施し、補強を加えたことを語るものであろう。しかしこうした補強工作がどの程度の成功をおさめたかということは、またおのずから別箇の問題である。むしろ全體としてこれを見るとき、理論構成はいささか寄木細工の感を免れず、母屋と離れを無理に渡り廊下で結びつけたといったような恰好で、有機的な統一性をかちえたとは評しがたく、理論は複雑さを増しただけ、明晰さを缺くにいたつたように、わたしには思われる。

工業と農業との相互関連性は、他方において、經濟の發展段階の相違、先進工業國と後進農業地域の關係となつて現われる。そして後者は、とりもなおさず資本主義國と非資本主義國との關係にはかならない。従つてカウツキーの理論の核心を洗つてみると、それは帝國主義の根源を非資本主義的世界環境の殘部をめぐる資本主義諸國の競争に求めるローザ・ルクセンブルグの見解と相去る遠くはない、という事實に氣づくであらう。しかるにローザの『資本蓄積論』が公刊されたのは一九一三年のことに屬し、カウツキーの最初の論文『帝國主義』の發展されたのは、一九一四年であるから、後者は前者におくれること、わずか一年にすぎない。この點から考えると、カウツキーはローザの直接の影響を多分にうけたのではないかという想定が一應なりたつてであらう。しかしカウツキー自身はローザからの影響について一語も言及していない。最初の論文においてはばかりでなく、後の論著においても、彼はつねに固い沈黙を守っている。何故であらうか。残念ながら、わたしはそれについての確な判断を下す何らの手がかりも與えられていない。けれども工業と農業との矛盾を重視するのは、カウツキーに固有の見解であつて、主著『農業問題』（一九〇〇年）をはじめ以前から機會あるごとに繰り返し強調しているところを見ると、あながちローザの直接の影響によるのみはいきれぬであらう。

六

帝國主義が登場してから第一次世界大戰の勃發するまで、すでに三〇有餘年の歲月が經過した。帝國主義は何處に行くのであろうか。カウツキーはみづから問を投げかけていう、『この帝國主義は、いまや資本主義的世界政策の最後の可能な現象形態をなすものであろうか。それとも他の可能的な現象形態が存在するのであろうか』（原本九一九頁、波多野譯本二九頁）と。これはひつきよう今後の見透しの問題であり、將來の豫測の問題にはかならない。したがつて解答は、いきおい蓋然的なもの以上に出ることをえないであらうが、カウツキーはきわめて示唆にとんだ注目すべき所説の提唱を試みている。

第一、農業地域における鐵道の建設、鑛山の採掘、生活資料および原料の増産などが、資本主義の生存に不可缺の條件をなすことについては、疑問の餘地がない。資本家階級が自滅を欲しないがぎり、對外的な活動を斷念しないであらうし、ブルジョア政黨のうちにも斷念しないものがある。農業地域を支配し、その住民を法律の保護外につき落すことは、帝國主義的活動につきものである、といつてよい。

が、これに對してカウツキーは起りうべき阻止的要因をあげている。いわく『もしその住民なり、資本主義的工業諸國のプロレタリアートなりが、そのような資本主義的抑壓を打破するに充分なほど強くなつてしまえば、そのときはじめてその地域の抑壓は終りを告げるであらう』（原本九二〇頁、波多野譯本三〇頁）。すなわち一方においては農業地域における住民の反抗があり、その兆候は東アジアやインドの成長、南アジアや北アフリカの汎イスラム運動に現われている。他方においては列強の軍備擴張があり、それに伴う租稅負擔の増加は、工業諸國の内部にお

けるプロレタリアの地位を悪化し、階級闘争の激發をもたらす。したがつて『帝國主義のこの面は、ただ社會主義によつてのみ克服することが出来る。』（同上）。

第二、バルカン戦争このかた軍備競争と植民地經營の經費が膨脹するとともに、資本蓄積、資本輸出が減少した。かくて帝國主義の經濟的基礎そのものが危機に瀕するに至つた。のみならずヨーロッパ諸國は、平和時に自國の債務を償還する必要に迫られているが、各國の公債相場は低落の傾向にある。このように見てくると、資本主義諸國が現在のような帝國主義的政策を續けるならば、のつびきならぬ經濟的行詰りに陥ることは、火を踏るよりも明かである。『かくて帝國主義はみずからの墓穴を掘つている。それは資本主義を發展させる手段から、それを阻止するものとなる』（原本九二一頁、波多野譯本三三頁）。果して然りとすれば、政策の一大轉換を行つて、絶望的な破局に突入することを回避する可能性があるかどうかを検討することは、けつして無意味ではないであらう。カウツキーは自己の論理をこのように押し進めると同時に、將來に對する見透しとして、『超帝國主義』の到來に想到したのである。

カウツキーはいう、『世界大戦後における軍備競争の繼續に關する經濟的必然性は存しない。軍備競争は資本家階級そのものの立場から生ずるのではなくて、せいぜい軍備に利害關係をもつ若干の人々の立場から生ずるにすぎない。逆に資本主義經濟は、資本主義諸國の對立によつて極度に脅かされるのである。かくて將來を見透す資本家は何人といえども、その同志たちに呼びかけるに相異なる。『萬國の資本家よ、團結せよ！』』（原本九二〇頁、波多野譯本三一頁）。『われわれはかつてマルクスが資本主義について述べた言葉、すなわち獨占は競争を生み、競争は獨占を生むという言葉を、帝國主義についても語ることが出来る。大經營、大銀行、大富豪の激烈な競争は、小

勢力を併合した大金融勢力のカルテル思想を生んだ。かくしてわれわれは、いまや帝國主義列強の世界戦争から最
強國同士の結合が生じ、もつてその競争を終らせるということができる』(原本九二二頁、波多野譯本三三頁)。「そ
れゆえに純經濟的立場からすれば」と前置きして、カウツキーはさらに言葉をにつづける。「資本主義がなお一つの
新しい段階を生き長らえること、カルテル政策が對外政策に移行すること、すなわち超帝國主義なる一段階が生成
することは、否定できない。われわれはこの超帝國主義に對しても、帝國主義に對すると同じように力強く闘争せ
ねばならぬことは、もちろんだが、その危険は軍備競争および世界平和の脅威に存するのではなくて、他の方面
に存するのである』(原本九二二頁、波多野譯本三四頁)。

要するにカウツキーは帝國主義を克服する要因を、一方において後進地域における被抑壓民族および先進工業國
における被抑壓階級の反帝國主義的活動に見出すと同時に、他方においては、互いに對立抗争する列強帝國主義者
の妥協と提携によるプロレタリア階級の共同搾取に見出すわけなのであつて、後者は彼のいわゆる『超帝國主義』
にはかならない。それは政策史の上でまさに帝國主義のつぎの段階を劃するものである。一見したところ、カウツ
キーはそれを純經濟的な論理過程の展開として思辨的に想定しようと説いているかに見えるが、前後を通讀すると、
むしろ第一次大戰の前夜に現前したいくつかの兆候によつて豫示されている、と主張するものの如くに讀まれる。
その論調はかなり強い。いずれにしても、超帝國主義が到來したあかつきに、戦争の危機が遠のくことはたしかで
あろうが、カウツキーの眞意はそうした平和の福音を傳え、もしくは社會主義への漸進的な移行を示唆するにある
のであろうか。それとも列強資本家のインターナシヨナルの成立は、國際プロレタリアートの地位を脅す危険をも
つことを指摘し、暗に社會主義インターナシヨナルの結束の必要を説いたものと解すべきであらうか。多くの論者

は前の解釋に傾き、かつそこに批判の征矢を集中してゐるようである。しかしわたしは後の解釋も可能であり、崩壊に瀕した國際プロレタリアートの共同戰線の再編成を促す呼びかけと見做すこともできるのではないかとおもふ。ともあれ、かりにカウツキーの超帝國主義論が單なる平和主義の表明にすぎないとしても、そうした見解は彼のみの特有のものとすることはできない。同様の見解は、すでにホブソンの『帝國主義論』（一九〇二年）に端を發し、とりわけ一九一一年に出たホブソンの『投資の經濟的説明』の中にいとも鮮かに述べられてゐる（拙稿「反帝國主義者ホブソン」『經濟論叢』第七四卷第三號一一頁以下）。これ、カウツキーはおそらくホブソンの影響をうけたのではないかと推定されるゆえんである（E. M. Winslow, *The Pattern of Imperialism*, 1948 p. 154）。もとよりカウツキー自身はホブソンについて一語も費してゐないから、明白な證據をあげることは不可能に屬するけれども、亡命時代のロンドン生活の體驗からして、彼がひと一倍イギリスに深い關心をよせ、つね日ごろイギリスの文獻に親しんでいたという事實を計算にいれるならば、ホブソンの影響をうけなかつたと推定することの方が、遙かに不自然であり、困難であることだけは、たしかである。

附記

カウツキーからの引用にはノイエ・ツァイトの頁數と波多野氏の譯本の頁數とを併記したが、譯文は必ずしもそのまま借用しなかつた。ちなみに本稿は、文部省科學研究費による研究成果の一部である。